

## ナヤ・ネパールを求めて：包摂・運動・移民

著者	南 真木人
雑誌名	日本ネパール協会会報
巻	224
ページ	16-16
発行年	2011-09-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5113">http://hdl.handle.net/10502/5113</a>



日本ネパール協会関西支部会員総会と講演会

『ナヤ・ネパールを求めて—包摂・運動・移民』

南 真木人 (国立民族博物館文化資源研究センター・准教授)

2011年6月11日(土)、京都私学会館において、平成23年度・日本ネパール協会関西支部会員総会と講演会が開催され、引き続きもたれた懇親会と合わせて25名が参加した。以下は、講演の概要である。

昨年7月に逝去した梅棹忠夫・国立民族学博物館初代館長は、1962年に初めてネパールを短期訪問し、『朝日ジャーナル』に次のように記していた。「国の独立と発展のためには、ナショナリズムは必要だ。しかし、こういう国の場合、そのナショナリズムが、もしひとつの部族による文化的統一をとまうのなら、こういう国は空中分解するおそれがある。ネパールは、あるいはアジアにおける新型のナショナリズム、新型の国家をつくりだすかもしれない。複数の部族の、文化的共存と政治的連合、そして国際的中立という方向である。」(1989年『梅棹忠夫著作集』第6巻)。

それから約半世紀を経た2008年、ネパールはまさにこの予言どおり、国王を頂点とするヒンドゥー・ナショナリズムに基づく王制が崩壊し、連邦民主共和国として歩みはじめた。肝心の新憲法はまだ公布されていないが、ナヤ(新)・ネパールの行方をその鍵概念である「包摂」、運動、移民の動向から考えてみた。

ナヤ・ネパールの行方を占う、最近のネパールの印象的な光景(スペクタクル)は、トリブバン空港の出国ロビーで大挙して待つ海外出稼ぎ労働者の姿や、Bhat-Bhateniなどのスーパーマーケットに群がる家族連れ、高級レストランで食事を楽しむネパール人、バイクや自家用車の普及と交通渋滞、高層マンションの建築ラッシュなどではないか。また、カトマンズの中流階級の家庭の多くが、子弟を欧米諸国に留学や就学させるようになった現象も特筆すべきだろう。少なくともカトマンズでは、消費文化や都市的生活スタイルを享受する中流階級が生まれ、そうした都市文化を自らのアイデンティティとする若年世代が増えているのである。

こうして見ると、最長1日14時間の停電や長引く政治の混迷にもかかわらず、ネパールの景気はけっして

悪いように見えず、むしろバブル経済に近い兆候があり、人びとの生活もそこそこ活気があるように映る。本講演では、海外出稼ぎ労働の実態とその送金にとどまらない社会資本的な意義、グルカ退役兵の英国永住化、日本で急増しているインド・ネパール料理店とそこで働く多くのネパール人などの話題から、移動の選択肢があることの社会の風通しの良さや村にまで広がる活気を指摘した。また、政治・文化的にはさまざまなマイノリティ集団が、「包摂」(サマバーシカラン)という同床異夢の掛け声のもとに、権利の承認を求めさまざまな運動を展開していることをマガル人の事例から紹介した。そうしたなかでNGOのなかにも、それまでお客さん扱いされてきた開発の当事者が、自立的な活動を開始していることを漁撈民の運動の事例から見た。

社会全体にみなぎる自由な空気と活気は、おそらく移民すなわち移動の自由と「包摂」を求める多様な運動の活性に起因すると考えられる。それはとりもなおさず、マオイストが起こした運動、すなわち「人民戦争」とその余波としての王制廃止により助長されたものであり、マオイスト運動はグローバル化と資本主義、包摂の民主主義をネパールの隅々に行き渡らせるといふ、ある意味でマオイストの究極のゴールとは異なる、皮肉な逆説を生んだとも言えよう。ナヤ・ネパールは、梅棹が指摘したような、文化的共存を担保したアジアにおける新型のナショナリズム、新型の国家として生まれ変わることができるのか。まずはその試金石となる、憲法制定の再延長された期限が、本年8月末に迫っている。

\*\*\*\*\*

ネパール情報デスク開設のお知らせ

11月から、日ネ協会の情報デスクをネパールの南部タライの中央に位置するナラヤンガートに開設します。インターネット・メールやスカイプを通してニュースをお送りします。従来通り、様々なご相談を承りますので、事務局へご連絡ください。

(担当 伊藤ゆき)